

「初期曹洞宗における仏弟子の自覚と羅漢供養」

石井清純（駒澤大学）

本論は、道元禅師と瑩山禅師における僧団組織の形成時期を「初期曹洞宗」と定義し、『正法眼蔵』および『伝光録』を中心に「仏弟子」及び「声聞」の位置づけについて確認し、次いで、確認した仏弟子観にとの対比の上から、在家信者を集めて開催されていた「羅漢供養法会」における羅漢の位置づけについて分析することを目的としたものである。

I. 『正法眼蔵』・『伝光録』における仏弟子

両書における「仏弟子」とは、いわゆる、「釈尊の直接の弟子」ではなく、「正伝の仏法の継承者」として用いられている。管見によれば、『正法眼蔵』における「仏弟子」の用例は 23 例、『伝光録』では 4 例を数えるが、それらの多くが、「仏弟子」を過去の存在ではなく、執筆段階において、釈尊の教えを遵守し、実践する存在として扱っているのである。

さらに、用例は省略するが、両書において、「仏弟子」を、僧形の実践者として位置づけようとする傾向を見出すこともできる。

II. 羅漢・声聞

次いで、仏弟子としての「声聞」の位置づけについて用例を見ると、これについては、『正法眼蔵』「三十七品菩提分法」巻の「声聞と菩薩とあひにたりとも、かならず別なるべきなり」という一節が最も象徴的である。また『伝光録』においても、「声聞の篇聚」は捨て去るべき対象とされており、大乘の菩薩を声聞・縁覚より上位に位置づけ、その思想的優位性を主張するという大乘仏教の思潮が明確に意識されている。

ただ、例外的に『正法眼蔵』「阿羅漢」では、阿羅漢を、誤りなく仏法を理解し実践しているという条件の下においては四果に位置づける。これは、道元禅師の、特に仮名『正法眼蔵』における全体工程の思想的背景の上で解釈すべきものといえる。

III. 羅漢講式における羅漢の位置づけ

以上のように、仏弟子および声聞に対する位置づけを見たところで、それらを対象とした法会の位置づけについて考察する。道元には「羅漢供養式文」の断簡が、瑩山には『瑩山清規』「羅漢供養式」が残されており、羅漢供養法会が営まれていたことが分かる。ただし、道元禅師においては、法会の記録が、伝記資料の注記などの 2 次資料にのみ記録されていることには注意を要する。

講式の内容については、すでに桐野好覚「道元禅師と羅漢供養 一道元禅師撰『羅漢供養式文』再考一」（『宗学研究紀要』15、2002 年）において、両者の講式が、ともに『法住記』に依拠し、内容的にかなり類似していることが指摘されている。

良く知られるとおり、『法住記』は、十六羅漢が釈尊の遺囑により神通力を発して仏法を護持していることが主題となっている。すなわち、この法会における十六羅漢の位置づけは、先に見た教理的な位置づけとは性格を異にしているということができよう。

両祖の時代に行われていた法会の意図や頻度については、資料が不十分で結論を下すことはできないが、このような傾向については、永平寺や永光寺の僧団組織と、その後の日本曹洞宗としての僧侶と在家者との位置関係などの諸要素を盛り込んだ考察が必要であると考えられる。

キーワード：羅漢供養、道元、瑩山